A&N④「三つ子のアリバイ」

1

「ところで、この事務所、今までどんな事件が舞い込んできた？　結構気になってたんだよね」黄金井美月（こがねいみつき）は身を乗り出した。

「そういうのは、守秘義務っていうのがありましてね……」

明瀬匠悟（あかせしょうご）は渋ったが、彼女はあきらめずに、「いいじゃない、ちょっとくらい話したって大丈夫。誰も聞いていやしないんだからさ」

と、しつこく迫ってくる。明瀬は戸惑いを隠せないでいた。その様子を、永緑涼（ながみどりりょう）は隣で口を押えて他人事のように笑っていたのだが、明瀬が質問に答えそうにないと判断した黄金井と、不意に目が合ってしまった。次は自分が標的にされると瞬間的に悟った永緑は、うろたえて、「ぼ、僕は何も言いませんからね。いくら先輩とはいえ、これだけは言えませんよ」

明瀬匠悟と永緑涼は、雑居ビルの三階の一室を借り、完全紹介制の探偵事務所を構えている。「完全紹介制」の言葉通り、ここに訪れるのは、ほとんどが彼らの知人か、知人に紹介された人物だ。わざわざそんなところに持ち込まれてくる事件だけあって、それらは推理小説に出てくるような、不可解なものばかり。

その日は事務所に、黄金井美月という女性が訪れていた。彼女は、明瀬が大学時代に所属していた推理小説研究会、通称〝ミス研〟の会長だった女性である。明瀬の二つ上の先輩だ。永緑は明瀬よりも一年後輩なので、永緑にとっては三つ上の先輩にあたる。ちなみに、永緑は現役の会員であり、現在、会長を務めている。

この話の本筋には関係がないため、その具体的な内容は割愛するが、黄金井がこの日やってきたのは、ある連続見立て殺人事件を明瀬に解決してもらうためだった。

そして、冒頭の質問がされたのは、事件の解決後、雑談に入ってすぐのことだ。結局、黄金井は二人から過去の事件について教えてもらうことはできなかった。相当に未練があったようで、帰る直前にもそのことを頼んだが、にべもなく断られ、肩を落とした。彼女は去り際に、弟によろしく、とだけ力なく言って出ていった。黄金井には弟がいるのだが、彼もミス研所属なのである。

事務所の扉が閉まった後で、明瀬は肩をすくめた。

「あの様子じゃ、今度遊びにでも誘って、そこで事件の話を聞き出そうとしてもおかしくない」

「やめてくださいよ、縁起でもない」

そう返した途端に、永緑のスマートフォンが鳴った。永緑が慌ててそれを取り出すと、メールが受信されていた。

差出人は、黄金井だ。

「さっそく、デートのお誘いらしいね」と明瀬はからかった。

2

男は、自宅で途方に暮れていた。その原因はもちろん、彼の足元に転がっている、早津元晴（はやつもとはる）の死体だ。

――殺してしまった。

その言葉が頭の中をぐるぐると回るだけ。彼は半ば、思考停止していた。しかし、いつまでもそうしているわけにもいかない。彼は、その興奮しきった頭で何かを考えようとする。が、何を考えればいいのかが分からない。どうしよう。いったいどうすれば、何をすればいい。彼はただ、そこに立ち尽くしていた。

突然、電話の着信音が響く。彼は一瞬硬直し、視線を泳がせた。ど

こから音が聞こえてくるのかと探すと、自然と足元に目が向いた。元晴の死体から聞こえてきている。
とっさに体が動き、死体のズボンのポケットから音源を探り当てるとそれを取り出す。衝動的な行動で、指紋のことなどは頭になかった。だが、もし気づいても、今はそれを悔やむ余裕などなかっただろう。取り出したスマートフォンに表示されている発信者が、死んだはずの早津元晴だったからだ。

3

早津吉晴（よしはる）は、紺のコートを着込み、紺の手袋をはめ、紺のネックウォーマーで鼻のあたりまで顔を覆い、さらに紺のニット帽を深々と被って、まさに紺色揃えの完全防備といった出で立ちだった。今日は気温が氷点下の真冬日であるし、防寒の点では、そのくらいの恰好でちょうどいいのかもしれない。ただ、紺色で統一された服装はやや目立っている。
吉晴は、永緑を見つけると、そちらへ近づいて挨拶を交わした。吉晴はミス研所属でこそないが、永緑の大学の後輩だ。
それはさておき、さっそく永緑が本題を切り出した。
「それで、相談というのは？」
「ええ、そのことなんですが……」
吉晴は、弟である元晴の話を始めた。内容は弟から事前に聞いた話そのままだが、彼本人からは話せない事情があったため、吉晴が伝えることになったのだ。具体的には、自作の長編小説を読んでみてほしい、という依頼であった。
元晴によれば、永緑たちに触発されて、試しに書いてみたらしい。ミス研では、会員が書いた推理小説をまとめ、会誌として毎年発行していて、もちろん、目の前の永緑も書いている。そのことに刺激を受けたのだそうだ。
「まあ、この小説はミステリーではないんですが」と吉晴は弟の小説が入った封筒を渡しながら言った。「できれば、今すぐにでも読んでもらいたいところなんですけど、わりと長いので……。読み終わったら、連絡してください」
感想が聞きたい、と彼の弟は言っていた。吉晴は用事を一通り済ませたので、早々と別れを告げて立ち去ろうとする。しかし、一つだけ言い忘れていたことがあったので、振り返って付け加えた。
「あと、このことは邦晴（くにはる）たちにも秘密なんで」

4

「僕、さっき吉晴と会ったんですよ。大学から出たところで、ばったり」
「え、そうなの？　奇遇だね。実はこっちも、元晴君と会ってきたところなんだよ」
永緑と黄金井は、外の街を眺めながら話していた。ここは二人が立ち寄ったフクロウカフェだ。去年の四月ごろ、永緑のいる事務所にフクロウがらみの事件が舞い込んできたことがあった。それ以来、永緑の中でフクロウが一種特別な存在になっている。そのため、黄金井と一緒に歩いていて、偶然見かけたこのカフェに入ることにしたのである。
「それじゃあ、僕たちが今から邦晴に会いでもしたら、僕らはばらばらに三つ子全員に会ったことになりますね」
そうなればちょっとした奇跡だ、と永緑は笑った。
早津兄弟――吉晴、邦晴、元晴の三人は、三つ子である。一応、吉晴が長男、邦晴が次男、元晴が三男ということになっているが、生まれた日は同じだ。

その三つ子という、物珍しい人種が同じ大学にいると聞き、会いに行ったのが、永緑たちが早津兄弟と出会うきっかけであった。永緑たちは当初、三つ子ならではの、同じ顔が三つ並んでいる光景を期待していたのだが、実際は違っていて、肩を落とすことになった。

理由は二つある。一つは、同じ大学にいるのは吉晴と元晴だけで、邦晴は違う大学であったこと。要するに、三人並んだ光景は見られなかったのだ。

そして、もう一つの理由は、吉晴と元晴の顔が、そっくりではなかったということだ。兄弟なので、目元とか、声とか、部分部分では確かに似ているのだが、全体的な印象は少し違っていた。二卵性だそうだ。

本来は二卵性双生児となるはずのところが、受精卵のうち、一方が二つに分かれ、二卵性の三つ子になったらしい。つまり、瓜二つの双子と、普通の赤ちゃんが、同時に生まれたようなものだ。彼らによると、三つ子は、むしろ二卵性が多いという。考えてみれば、当たり前にも思える。三卵生というのは聞いたことがないし、一卵性の場合は、一つの受精卵が二つに分かれるのを二度繰り返すのだから、確率はとんでもなく低いだろう。

ところで、二卵性ということは、三人のうち二人は容姿が酷似しているということだ。彼らの場合、吉晴と邦晴がそうで、全くと言っていいほど見分けがつかない。期待通りというわけではないが、それでも双子のトリックは使えるのである。そのことを変に感慨深く思ってしまうのは、ミステリ読みのさがというものであろう。

早津兄弟は、似ている二人を見分けるため、ある工夫をしていた。自分たちが着る服や身の回りの小物などの色をそれぞれ別の色で統一しているのだ。例えば、邦晴であれば、緑の服しか着ないといったように、自分の着られる服の色を一色だけに絞っているのである。それによって、付き合いの浅い人物でも、すぐに彼らを見分けることが可能だ。本来、顔で見分けのつく元晴にはその制限は不要なのだが、兄弟に合わせて青色しか着ないことにしているらしい。

「そういえば、元晴君は寒そうだったなあ、かなりの重装備だったし」

「ええ、外は寒いですからね。吉晴も寒そうにしてましたよ。まあ、あれは自業自得の感もありましたけど……」

外の景色から目を離して、店内のフクロウに目を向けると、大きなフクロウが首をかしげてこちらを見つめていた。羽は、やや薄い茶色の下地に、黒の線を少し書き入れたような模様だ。目つきはやや鋭く、虹彩がオレンジ色をしている。

何となく気になって、永緑が店員に尋ねると、ユーラシアワシミミズクだと教えてくれた。

なるほど、これが例の……。永緑は、フクロウに負けないくらい目を大きくして、相手を観察し返した。このフクロウは、過去の事件に関わっていたのと同品種なのだ。ただ、事件は口頭で伝えられただけだったので、実際にそのフクロウを見たことはなかった。今初めてそれを目にし、内心、永緑は結構感動している。これに浮かれて、永緑は大きなフクロウの置物を買って帰り、置き場所がなくて明瀬を困らせることになるのだが、それはまた別の話だ。

一点を見つめている永緑とは対照的に、黄金井は店を見回し、フクロウにもいろいろいるなあ、などと言っていた。

「同じに見えても、品種が違ったりするみたいだし……どうせなら、名札でもつけてくれれば分かりやすいのに」

文句というわけでもないが、黄金井はそうつぶやいて、外に目をやった。すると、なんという巡りあわせだろうか、店の前を足早に通り過ぎていく邦晴を、黄金井は見つけたのである。黄金井は急いで店を飛び出し、邦晴を呼んだ。

5

早津元晴の死体が兄の吉晴によって発見されたのは、午後十時ごろ

のこと。すでに、死後十二時間ほど経過していた。
　発見された場所はここ――早津元晴の自宅だ。なんでも、この元晴という大学生は三つ子であるらしく、家は兄弟と共有しているそうだ。これがいわゆるシェアハウスというものだろうか、などと灰住（はいずみ）刑事が思っていると、いらだちをにじませた声が聞こえてきた。
「……あのね、君、何度も言うけどね、そういうことは教えてあげられないの。いい加減帰ってくれないかな」
　――まだやっているのか。灰住はうんざりして、ため息をついた。部屋の外で、部下の若い巡査が一般人の二人組――一応、関係者ではあるのだが――の対応をしているのだ。灰住も先程まで、彼らの事情聴取をしていたが、確かにあれは厄介だろう。連れの男はまだおとなしいからいいが、女の方は事件の情報にしつこく食いついてくる。推理小説研究会の会長だか何だか知らないが、虚構と現実をごっちゃにしてもらっては困る。人死にが必ずしも事件とは限らないというのに、何ともたくましい野次馬根性だ。
　灰住は、元晴の死に関して、事件性は低いと考えていた。元晴の死因は階段での転落による頭部の打撲。この家の階段はかなり急であり、慌てて駆けおりるようなことがあれば、その拍子に滑り落ちてしまうことは、十分起こりうるだろう。実際、元晴は階段を降りたところで倒れ、階段の痕跡などからも、彼がそこで転落死したのは間違いない。
　確かに、階段の上から何者かが元晴を突き落とした可能性もあるが……。
　兄弟のどちらにも、アリバイがあるのだ。
　まず、早津元晴の死亡推定時刻だが、午前十時十分から十一時十分までの一時間のうちに亡くなったという検視の結果に加え、元晴が死んだ日の午前十時二十分ごろに、彼と会ったという女性――これが今、事件のことをしつこく訊いている女だ――が現れた。彼女と元晴が会った場所は、家から三十五分ほど離れているため、会った時間の前後三十五分は、元晴が外出していたことになる。この証言により、元晴は十時五十五分までは生きていたと考えられる。
　検視の結果と合わせて、元晴の死亡推定時刻は、十時五十五分から十一時十分までの十五分間に絞られた。
　ということで、この十五分間に現場にいなかったことが示されれば、アリバイ成立である。
　吉晴の場合は、二つの証言がそのアリバイを支えていた。一つは、十時三十分きっかりに、大学で彼と会ったというもので、この証言は例の女性の連れの男によるものだ。大学というのは、元晴と女性が会っていた場所のほど近くにあり、現場からの所要時間もほぼ同じだ。よって、この証言で、吉晴は九時五十五分から十一時五分までの間は、少なくとも外出していたと分かる。
　また、もう一つは、十一時十分以降、夜になるまで、友人――これは件の二人組とは関係ない――と遊んでいたという証言だ。これによって、十時三十五分以降のアリバイが確定し、もう一つの証言と合わせると、九時五十五分以降は外出していたということが分かる。したがって、死亡推定時刻の十一時前後のアリバイは完璧だ。
　では次に、邦晴の場合だ。彼には同じ大学の、例の男女の学生二人と、十一時二十分からしばらくの間、フクロウカフェにいたというアリバイがある。たまたま店の前を通りがかったところ、店内にいた二人が気づき、呼び止められて、一緒にカフェで過ごしたのだという。そのカフェも大学近辺にあり、現場から移動するのにかかる時間は同じだ。よって、邦晴には、十時四十五分以降のアリバイが生じる。死亡推定時刻である十時五十五分から十一時十分までの間、外出していたことが証明されたのである。
　……とまあ、一通り手に入れた情報を整理してみたが、やはり事故だろう。確かに、意味のありそうな事実はいくつもある。例えば、同じサークルの男女が、それぞれ別の関係者と事件の当日に会い、さらに二人が合流した後でもう一人の関係者とも出会ったなんて、恐ろし

いほどの偶然だ。その上、それが三つ子というのだから、奇跡としか言いようがない。
　ほかにも、死んだ元晴が、二卵性の三つ子のうち、他の二人とは似ていない一人だったことも、気になるといえば気になるし、どの証言の場所も同じ地域であり、現場からの時間がほぼ同じというのも、できすぎている気はする。
　しかし、そういったものは、あくまで意味がありそうに見えるだけであって、実際には意味をなさないのだろう。無理に意味づけするより、単なる偶然の産物と考えた方がむしろ正確であることも多いのだ。
　唐突に、部下が扉を開けて入ってきた。興奮しているからか、走ってきたからか、鼻息が荒い。部下は声をひそめもせず、被害者の服から発見されたスマートフォンに指紋が残っていなかったことを告げた。
　これはまずいのではないだろうか。灰住は少し部屋の扉を開けて外をのぞいてみた。案の定、外にも聞こえていたらしく、事件の情報を得た女が目を輝かせていた。隣を見ると、連れの男も案外興味津々らしく、そわそわしている。積極的なので女の方にばかり気を取られていたが、結局、どっちもどっちのようだ。
　すぐに扉を閉めた。まあ、聞こえてしまったものは仕方がない、と灰住は気にしないことにした。実際のところ、もう関わりたくないというだけだったのだが。
　しかし、問題はこの事実――元晴のスマートフォンに指紋が付着していなかったということを、どう解釈するかだ。元晴の死体は、手袋をはめていなかったので、おそらく、元晴が服に入れたのならそれには指紋が付いているはずだ。しかし、現実はそうではない。ということは、何者かが元晴の服からそれを取り出し、指紋を拭き取るなどしたということになる。しかし、なぜそんなことを……？　犯人なら――殺人だとすればの話だが――そういった指紋の残るような行動には細心の注意を払うはずだ。
　はて、これはいったいどういうことだろうか……。

6

　いつも通り、明瀬と永緑は事務所のソファに向かい合わせで座って、永緑が明瀬に事件の概要を説明していた。
「……というわけで、どうやら、元晴君のスマートフォンには指紋が付いていなかったらしいんです。これはつまり、誰かが拭き取ったということになります。では、誰が、なぜ拭き取ったのか。これも、疑問点の一つですね。……どうでしょう？　これで大体のことは話したと思うんですが、何か思いつきませんか？」
　永緑は事件の概要を明瀬に伝えきると、期待の表情で明瀬に尋ねた。一方、明瀬はあきれたように永緑を見ながら、
「いったいどうやってそんな情報を手に入れてきたんだい？」
「いやあ、刑事さんと、邦晴君に直接聞いたんですよ」
　どうせ無理やり聞き出したんだろうなあ、と思ったが、それは口に出さないで、明瀬は自分の考えを述べ始めた。
「……この事件の厄介なところは、常識的に考えれば事故で、しかも、推理小説好きとしてのアプローチでは解決できないところだね」
　推理の始まりを察知し、永緑は身を乗り出した。
「常識的に考えれば事故、というのは分かりますけど、推理小説好きのアプローチでは解決できない、というのはどういう意味ですか……？」
　永緑は問うが、明瀬は、まあ、順を追って説明するよ、と答えを先送りにした。
「初めに言っておくと、これから話す解釈は、事故である可能性を考えない場合の解釈であって、もちろん、これが事件ではなく事故である可能性も十分にある。それだけは、一応肝に銘じておいてほしい。
　……まず、この事件が事故でないならば、犯人として考えられるのは二人だけ。吉晴君と邦晴君だ。さすがに、外部の人間がわざわざ家

に押し入って、階段から元晴君を突き落として出ていくなんてことは、ありそうにないことだからね。外部犯の可能性は考えなくていいだろう。

では、次に、どちらが元晴君を殺したのか。ここが問題だ。どちらにもアリバイがあるからね。しかし、逆に言えば、二人しかいない容疑者の両方にアリバイがあるということは、少なくともどちらか一方のアリバイは崩れる――つまり、偽りのアリバイが含まれているということなんだ。今回の事件の場合、証人に、会った時間もしくは場所を誤認させることはできないだろうし、また、死体の状態から判断される死亡推定時刻をずらすことも難しいだろうから、疑うべきは、証人が会っていたという人物が、本当にその人物だったかということだ。

じゃあ、どのアリバイが虚偽のものかを判別するには、どうすればよいだろうか。個人的には、その人物と会っている時間が短いアリバイを、優先して疑うべきだと思うね。犯人の心理としては、証人と長く一緒にいると、その分ぼろが出やすくなるわけだから、なるべく証人と会っている時間は減らしたいはずだ。

だから、ひとまず、証人がその人物と会っていた期間の長い二つのアリバイは信用できるという仮定をもとに進めよう。すなわち、吉晴君が十一時十分以降、友人と遊んでいたというアリバイと、君たち二人が、十一時二十分から邦晴君とフクロウカフェで一緒に過ごしたというアリバイだ。これらが事実であれば、吉晴君には十時三十五分以降の、邦晴君には十時四十五分以降のアリバイが成立していることになるね」

「待ってください。元晴君の死亡推定時刻は、十時五十五分から十一時十分までの十五分間なんですよ。それじゃあ、二人とも元晴君を殺せないことになってしまいます」

「うん、だからその、死亡推定時刻に嘘があるんだ」

「え、でも、さっき先輩は、それをずらすのは難しいと言っていませんでしたか？」

「ずらせないのは、死体から判断される純粋な死亡推定時刻のことだ。今、実際に元晴君の死亡推定時刻として考えられている十時五十五分からの十五分間は、元晴君と十時二十分に会ったという証言から、前後三十五分間は元晴君が生きていたということを前提にした死亡推定時刻なんだよ」

「それじゃ、まさか、あの元晴君は……！」

「そう、十時二十分に外にいた元晴君は、本物ではなかったんだ。となれば、死亡推定時刻は死体の状態から判断した、十時十分から十一時十分までの一時間に広がる」

「ということは、えーと、待ってください……。つまり、二人ともアリバイが崩れるということですか？」

「いや、そういうわけではない。吉晴君には、十時三十分ちょうどのアリバイもあるんだからね」

「でも、それが嘘である可能性もあるんでしょう？」

「いや、それはない。なぜなら、もし、それが別の人物――つまり、吉晴君の兄弟だったとすれば、それが元晴君の場合、むしろ死亡推定時刻が絞られて犯人がいなくなってしまうし、邦晴君の場合、意味のないアリバイ作りということになってしまうからだ。元晴君が十時二十分に外にいたという偽装工作をしているのだから、わざわざリスクを負ってまで、そこで別人として人に会う必要はないんだよ」

「では、十時二十分の元晴君は誰だったんですか？」

「もちろん吉晴君だ。これが邦晴君だとすると、二人ともにアリバイが成立して、どちらも元晴君を殺すことが出来なくなってしまうからね。

推理小説好きのアプローチでは解決できないというのは、こういうことなんだ。推理小説に毒されていると、瓜二つの二人がいれば、どうしてもその二人の入れ替わりを考えてしまう。すなわち、双子のトリックだね。しかし、この事件においては、そっくりな二人がいるのに、似ていない二人が入れ替わっていたんだ。

いや、この言い方は正確ではないかもしれないね。本当は、吉晴君と元晴君もよく似てはいるんだ。ただ、吉晴君と邦晴君の組み合わせがもっと似ていたため、その二人の入れ替わりにばかり目がいって、別の組み合わせには思い至らない。これがこの事件の大きな落とし穴なんだ。

ほかにも、吉晴君が元晴君に変装できた理由はある。まず、三つ子が、それぞれ服の色を統一していたことだ。普段から彼らがそうしていたことで、周りの人間も、その服の色で三つ子を判断していたと考えられる。だから、吉晴君が元晴君の色――確か、青だったね――の服を着ていけば、青色が相手に、この人物は元晴君だという先入観を植え付けてくれる。そのあとで自分自身のアリバイを作るときには、さらに別の色の服を着込むか、中に別の色の服を着ておいて、外に着ている服を脱ぐかのどちらかをすればいい。

よって、この事件の構図としては、実行犯が邦晴君で、アリバイ作りをしたのが吉晴君ということになるね」

「なるほど、要するに、この事件は吉晴君と邦晴君の共犯だったわけですね」

永緑は納得したようにそう言ったが……。

「いや、違うよ」明瀬はあっさりと否定した。

「……え？　ど、どういうことですか？　元晴君を殺したのは邦晴君で、元晴君に変装してアリバイを作ったのは、吉晴君なんですよね」

「そうだけど、二人は共犯ではないんだ。本当の共犯は、吉晴君と、元晴君だったんだよ」

「殺された元晴君が、共犯だった……？」

「そうなんだ。本来、この事件で殺されるはずだったのは邦晴君で、元晴君が実行犯になるはずだった。計画はこうだ。まず、吉晴君が外で元晴君のふりをして人と会い、その後自分のアリバイを作る。その一方で、家に残っている元晴君は邦晴君を殺してから外に出て、それ以降のアリバイを作る。こうすることで、吉晴君が元晴君のアリバイを作り、元晴君は邦晴君殺害の容疑者から外れることができる、とまあ、こんな計画だったんだろう。しかし、元晴君が邦晴君を階段から突き落とそうとした時、邦晴君に気づかれて抵抗に遭い、逆に階段を転げ落ちてしまった。その証拠があのスマートフォンだ。あれは、元晴君がただの被害者だと思うから、指紋がないことを不思議に思ってしまうんだよ。彼が邦晴君を殺そうとしていたと考えればつじつまが合う」

「というと、どういうことでしょうか？」

「早津兄弟は、服だけでなく身の周りのものまで同じ色に統一していたんだよね。ということは、スマートフォンの色も別々の色を使っていたはずだ。そんな彼らが変装するときには、スマートフォンも交換して、色をそろえておくんじゃないかと思うんだ。もちろん、邦晴君を殺したかどうかの確認に、連絡手段がないといけないから、スマートフォンは必ず使うわけだし、そのスマートフォンを取り出すところを、もしかすると知り合いにでも見られるかもしれないから、一応色は揃えておくべきだという判断があったんだろうね。

だから、吉晴君は、元晴君に変装するために、青色のスマートフォンを元晴君から渡されていた。しかし、思いがけず、元晴君が殺されてしまう。元晴君のスマートフォンを持っていたことがばれれば、どんな疑いを向けられるか分からない。だから吉晴君は、元晴君の遺体を発見した後、元晴君と交換していた自分のスマートフォンを回収し、元晴君の服に、自分の指紋を拭き取ったスマートフォンを戻したんだ」

「それで、元晴君のスマートフォンには指紋が残っていなかったんですね」

明瀬は頷いた。永緑はさらに続けて、

「ところで、邦晴君にアリバイが出来たのは、本当に偶然のことだったんですね。彼は、元晴君のアリバイを吉晴君が作っていたことを知らなかったわけですし、邦晴君がすぐに家を出なければアリバイも成立していなかったでしょう。僕たちがフクロウカフェに寄っていなけ

れば、邦晴君もアリバイを示せたかどうか怪しかった」
「そういうことになるね。でも、例えばこんな考え方もできる。吉晴君と元晴君のもともとの予定では、彼らは邦晴君殺害後、連絡を取ることになっていたはずだ。それで、吉晴君は元晴君に電話をかけた。しかし、その時点ですでに元晴君は死んでいて、死体のすぐそばに邦晴君がいたとすればどうだろう。邦晴君は、そこにあるスマートフォンが誰のもので、電話が誰からかけれているのかを確認したはずだ。
　そこで彼は気づく。スマートフォンが交換されているということは、自分が元晴に命を狙われたことと考え合わせると、吉晴も自分の殺害計画に加担しているのではないか。そして、邦晴君が鋭い人物ならば、ここでこう推測したかもしれない。単に階段から突き落とすだけの計画なら、二人がかりでやった方が成功率は高い。しかし、そうしていないということは、吉晴にも何かしらの役割が与えられているのではないか、とね。吉晴が元晴のアリバイ作りをしているとすると、今すぐ外出して自分が人と会うなどすれば、自らのアリバイを作る事が出来るのではないか。そう考え、邦晴君は家を出た。そして運よく君たちと会うことができた。……と、こういうストーリーも考えられるよ」
「なるほど……」
　と、永緑が考え込むのを見た明瀬は、一転して明るく、
「そんなに深く考えるようなことじゃないよ。ただの想像だしね。そもそもこの事件自体、本当に殺人かどうかも分からないんだ」
　そう言うが、永緑は反論する。
「いえ、そうとも言い切れませんよ。実際、僕が会った元晴君――まあ、実際は吉晴君の変装だったわけですけど――はネックウォーマーをつけて顔を隠してましたし、黄金井君が会ったという変装していない吉晴君は、寒そうにしているわりには、コートも着ず、手袋もはめずに現れたそうです。つまり、これは、僕と会う時に着ていた、青系統である紺色の防寒具を脱いで、あらかじめ中に着ていた自分の色の服で黄金井君と会ったからではないでしょうか」
「確かにそうかもしれないね。でも、そんな傍証をいくら挙げても議論は進まないよ。こんなところで話していても、具体的な証拠を得られるはずもないし、そもそも、動機がいったい何なのかも分かってはいない。結論が出てもそれは所詮、机上の空論の結果なんだ。そろそろこの話はやめにしよう」
「そうですね……。分かりました。事件の話はこのくらいにしておきましょう」
　永緑の同意を得て事件の話が終わったので、明瀬は今、最も気になっていることを永緑に訊いた。
「……それよりも、どうだったんだい？　事件で台無しになったとはいえ、少なくとも昼までは、フクロウカフェに一緒に行くような、普通のデートだったんだろう？」
　すると、永緑は取り乱して、頬を染めつつ、「や、やめて下さいよ。まだそんな関係じゃないんですから」
　明瀬は、わかったわかった、と言って笑う。永緑は、本当ですってば、とむきになるが、明瀬はむしろ面白がって、
「いやあ、それにしても……。陽太（ようた）君だったっけ？　黄金井先輩の弟と、永緑君がこんな仲になるとはねえ……」
「どんな仲だっていうんですかあっ」
　彼女は、真っ赤になりながら叫んだ。